

## 近畿ブロック医療支援活動について

東病棟 5階（看護師） 堅田 弥生 西病棟 5階（看護師） 松本 亜矢子

私たちは6/7～6/12の約一週間、宮城県石巻市へ、近畿ブロック医療支援活動に福井大学チームとして参加した。到着翌日から実際に避難所での巡回診療が始まった。まず、チームで診察室を作り、診察の流れや役割を決めた。しかし、私たちは本格的な診察介助自体初めての経験で、緊張と不安は大きかったが、他のスタッフの支援により、少しずつ紙カルテの扱い方、問診の仕方、東北弁に慣れていった。震災から3ヶ月経ち、徐々に近隣の開業医も診療を再開し、避難所の巡回診療は減少しており、実際に受診した方も数人であった。巡回診療をしながら、避難所の生活環境のチェックを行い、食事は偏っていないか、トイレは清潔か、季節にあった寝具を使用できているかなどを確認した。確認した内容から避難所の問題点や人々の訴えを本部に報告し、本部が行政に伝え、対応する現状となっていた。

被災者の中には、津波の映像がテレビで映るかもしれないから怖くて見れない、震災の夢を見てしまい怖くて眠れないという方が存在し、まだまだ医療者の介入が必要であると感じた。私たちは限られた時間の中での活動で、継続して根気強く介入できないのがとても残念であった。そのため、次のチームに継続した介入が必要であることを伝えた。

また、各避難所にはリーダーがおり、自らも被災者でありながら、不眠不休で働いている人がほとんどであった。また、復興が進み、避難所に住む人が徐々に減少してきたが、高齢者は自立できずに、避難所に多く残っていた。避難所生活によりADLが低下している人には、ベッドの配布などADLが維持できる環境作りを考えることが必要であると感じた。

被災した当初は電気も水道もなく、雪が降り寒い中、布団も満足になく、せんべい1枚を家族みんなで分けて食べていたという時期もあり、被災者は最悪な環境を経験している。

そして、避難所の近くの海岸沿いでは、津波でほとんど何もなくなってしまった場所、まだ家に車がつっこんだままの場所、船が打ち上げられている場所もたくさんあった。徐々に復興は進んでいるが、戦地のような悲惨な場所はまだ存在していた。避難所によっては、かなりの異臭を放ち、目もしみるような危険な場所に避難している方々もいた。

巡回診療の終了を避難所に伝えると、安心するから続けてほしいと訴えがあり、避難所のニーズとの間に食い違いがあり、今後は今までの巡回診療を違った形で避難所のニーズに応えられるような関わりが必要だと感じた。

震災から3ヶ月経過し、ライフラインが復旧するなど、徐々に良くなる避難所生活に満足し、「ここは天国」と笑顔を見せる人や、「また2、3年後の良くなった石巻を見に来て。」と話す人もいた。ある被災者は、被災地の現状を目の当たりにした私たちが、状況を知らない人に伝え、そしてこの経験を活かしてほしいと語ったことがとても印象的であった。今回私たちは看護師として、避難所の診察介助という数日の関わりしかできなかったが、自分たちが見て感じたこと、被災者の方々や、ボランティアスタッフなどのから聞いた震災の話について、震災を体験していない人々に伝え、震災をいつまでも忘れないことが大切であると感じた。そして、一日も早く復興し、被災地で暮らす人々が笑顔で元気に生活できることを願います。そして震災で亡くなれた方々のご冥福をお祈りいたします。



(石巻市の避難所風景)



(石巻市内の被災地風景)



(外国からの応援メッセージ)